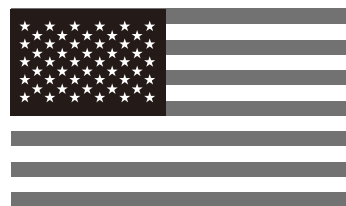


海外散歩

AACRで訪れたChicago



(公財) 実中研
西銘 千代子

・自己紹介

2025年4月より情報委員会委員を務めております、公益財団法人実中研の西銘千代子(にしめちよこ)と申します。「海外散歩」の執筆はもちろん、LABIOでの記事執筆が初めてのことで、まずは簡単に自己紹介をさせていただきます。

・経歴と抱負

私は2015年より鍵山直子先生のご指導のもと、実中研動物実験委員会の委員として活動を始め、2018年からは委員長を務めております。これまで学会活動などに十分に关わる機会が少なかったのですが、2024年には実験動物学会の実験動物管理者研修制度委員会の委員として、そして2025年からは日動協情報委員会委員として新たな一歩を踏み出すことになりました。今後は、これまでの経験を生かしながら、動物実験、実験動物業界の発展に少しでも貢献できるよう努めてまいりたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、情報委員会委員を拝命したばかりの私ですが、実は初回の委員会(2025年4月25日開催)を欠席してしまいました。その理由というのが、AACR(American Association

for Cancer Research) Annual Meeting、通称AACRに参加していたためです。今回の「海外散歩」では、このAACRで訪れたシカゴの様子をご紹介します。

・AACR 2025@Chicago

AACR 2025は、2025年4月25日から30日まで、シカゴのMcCormick Place Convention Centerで開催されました(写真1)。参加者は23,000人以上と報告されており、毎年2万人を超える研究者が世界各地から集まる、がん研究分野では世界最大規模の学会です。

ちなみに、2万人以上が参加する大規模学会としては、Society for Neuroscience(SfN)、American Geophysical Union(AGU)、BIO International Conventionなどが知られています。AGUは私の専門外ですが、地球科学分野の最大イベ

ントで、100か国以上から研究者が参加するそうです。今回初めてその規模を知り、大変驚きました。

こうした巨大な学会を開催できる都市は限られており、シカゴ、ワシントンD.C.、アトランタ、サンディエゴなどが主な開催地です。2025年はシカゴでの開催でしたが、同地で行われた前は2018年でした。実は私、2018年のAACRにも参加しており(2019~2024年は不参加でした)、今回は当時の様子も少し振り返りながら、シカゴの街を歩いた印象をお伝えしたいと思います。

・Windy City(風の街)Chicago

五大湖のひとつ、ミシガン湖の西岸に位置するシカゴは「Windy City

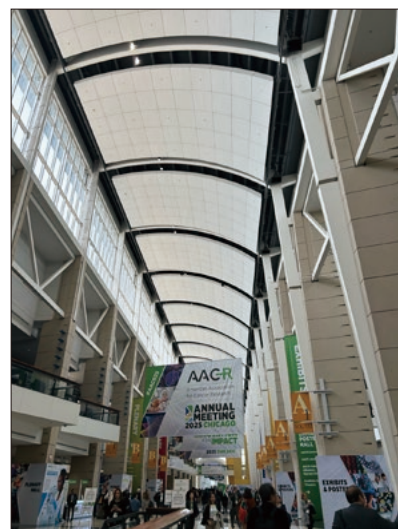


写真1: McCormick Place Convention Center 移動だけでも大変です

「風の街」という愛称で親しまれていますが、その由来をご存じでしょうか。確かにシカゴは風の強い街として知られていますが、実はこの呼び名の起源は、1893年のシカゴ万博（世界コロンブス博覧会）にまつわる“自慢話”にあるそうです。

コロンブスによるアメリカ大陸発見400周年を記念して万博の開催地が検討された際、シカゴとニューヨークが激しく競り合いました。そのときシカゴ市民は「我がシカゴこそアメリカの未来だ!」と熱心にアピールしたそうです。それを受けて、ニューヨークの新聞『The Sun』の記者が「Don't pay attention to the windy citizens of Chicago(シカゴの風のような〈=口先ばかりの〉自慢話に耳を貸すな)」と皮肉交じりの記事を掲載しました。これが“Windy City”の語源になったと言われています。

この記者が本当にシカゴの強風を知っていたかは定かではありませんが、実際に街は驚くほど風が強い!私が滞在した時も、とにかく強風で寒く、街中ではダウンコートを着ている人が多く見られました。ところが、翌日に晴れて無風となると気温も体感温度も上昇し、昨日までの防寒スタイルが一変。タンクトップ姿で歩く人々を見かけ、まさに「風の街シカゴ」らしい気まぐれな天候でした。

・シカゴグルメの代表 — Deep Dish Pizza —

風の街シカゴの名物料理と言えは「Deep Dish Pizza(写真2)」,日本語ではシカゴピザの方が馴染みがあるかもしれません。厚みのある生地の中にチーズとトマトソースが

たっぷり詰まったピザで、手で持って食べるのは難しく、ナイフとフォークが必須です。焼き上がるまでに時間がかかるため、待っている間は「Fried Calamari(写真3)」とビールを楽しむのが定番です。

Deep Dish Pizzaを提供するレストランには、スポーツバー的な要素があり、店内にはテレビが常設されているところも多くあります。試合の重要な局面になると、まるでシカゴの風が人々の熱気を運んでいるかのように、店内全体が歓声に包まれ、食事と観戦の両方で盛り上がる——そんなエネルギーな空気こそ、この街ならではの魅力です

・シカゴと野球 — カブスに吹いた日本の風 —

その熱気を最も強く感じたのは、やはり野球でした。

2025年のアメリカでは、まさに野球が大きな注目を集めた一年。MLBでは14人の日本人選手が活躍し、中でも**鈴木誠也(Seiya Suzuki)**選手と**今永昇太(Shota Imanaga)**選手が所属する**シカゴ・カブス**は、地元ファンの大きな声援を受けました。

シーズン開幕は3月18日~19日に東京で行われた「ドジャース対カブス」の東京シリーズからスタート。

私が滞在していた4月下旬には、Wrigley Field(リグリー・フィールド)でカブス対フィラデルフィア・フィリーズの2連戦が開催されました。

・4月25日:カブスが4-0でフィリーズを完封勝利。鈴木選手は2打数2安打、うち1本は二塁打と好調を見せ、チームの勝利に貢献しました。今永選手は登板こそありませんでしたが、ブルペンから仲間を支える

姿が印象的でした。

・4月26日:試合は10-4でフィリーズが勝利。鈴木選手は4打数2安打・3打点と気を吐きましたが、打撃戦の末にカブスは敗戦。今永選手の登板はこの試合でもありませんでした。

Wrigley Fieldでの試合では、2人の日本人選手が同時にフィールドに立つ瞬間は限られていたものの、鈴木選手の長打や今永選手の安定感あるピッチングは、地元ファンの間でも大きな話題となりました。

特に「**湖からの風(Lake Effect)**」が球場の打球の伸びや投球に微かな影響を与える点が注目され、ファ



写真2: シカゴ名物のDeep Dish Pizza 厚みが伝わるでしょうか?



写真3: ビールのお供のFried Calamariソースがまた美味

ンの間では「風もカブスの一員だ」と語られるほどです。

MLBというグローバルな舞台で、日本人選手がシカゴという伝統の街を沸かせている姿を、現地で感じられたのはとても印象的な体験でした。

・アメリカを席巻する日本人選手たち

もちろん、2025年に活躍した日本人選手の中には、ロサンゼルス・ドジャースの大谷翔平(Shohei Ohtani)選手も含まれます。大谷選手は指名打者(DH)と投手の二刀流で、2024年には50本塁打・50盗塁の歴史的記録を達成。2025年4月には打率約.310を記録し、複数の本塁打や盗塁で週間MVPを獲得しました。

Uberで移動中も、運転手は我々が日本人と知ると、決まって「オオタニは最高だ!」と話しかけられました。“Ohtani-san”の話題から始まり、日本人選手全員について語り出す勢いでマシンガントークが止まりません。

そんなエピソードからも、アメリカでの日本人選手の存在感がいかに大きいかを実感しました。

——もっとも、時には「運転に集中してほしい」ということもありましたが……(笑)。

アメリカ人にとって野球はアメリカンフットボールに並ぶ国民的スポーツのひとつです。地元の試合や選手の活躍は、単なる娯楽にとどまらず、地域コミュニティや文化の一部として深く根付いています。

・映画の記憶と旅の偶然 — The Drake Hotel —

今回の滞在先は「The Drake Hotel(写真4)」でしたが、読者の皆さんはこの歴史あるホテルをご存知でしょうか? 1920年に開業したホテルは、かつて王族のシカゴ滞在拠点として知られ、エリザベス2世女王やフィリップ王配、ダイアナ妃、マリリン・モンロー、ジョー・ディマジオ夫妻など、数多くの著名人が宿泊したことが有名です。館内には著名人のサインや写真、ゆかりのある品々が展示されており、滞在中はその長い歴史に思いを馳せながら過ごしました。

帰国後、何気なくテレビで放映されていた映画『ミッション：インポッシブル(M:I)』を観ていたときのことです。

M:Iはシリーズ第1作で、ベテラン工作員のチームが壊滅し、唯一生き残ったイーサン・ハントが裏切り者の疑いをかけられ、真犯人を追うという1996年公開のスパイアクション映画です。その中で登場する**The Drake Hotel**に関するセリフが、物語の鍵を握る重要な手がかりになっています。以下の内容にはネタバレを含みますので、ご自身で確認したい方は読み飛ばしてください(笑)。

映画の序盤、プラハでのミッション前、イーサン・ハント(トム・クルーズ)とジム・フェルプス(ジョン・ヴォイト)がチームのメンバーと共にセーフハウスで作戦を確認する場面があります。

そこで次のような軽いやりとりが交わされます。

イーサン・ハント：「Ahh, we missed you, Jim.」

ジャック・ハーモン：「Were you on one of your cushy recruiting



写真4：The Drake Hotel室内 この部屋にはどんな著名人が宿泊した??

assignments again?」

イーサン・ハント：「Yeah, where did they put you up this time? The Plaza?」

ジム・フェルプス：「**Drake Hotel, Chicago.**」

この時点では、ジムが直前の任務でシカゴのThe Drake Hotelに滞在していたことを明かす、何気ない雑談の一部にすぎません。

しかし物語の後半、このセリフが重要な伏線であったことが明らかになります。イーサンはセーフハウスにあった聖書に「**The Drake Hotel, Chicago**」のスタンプが押されているのを発見し、ジムこそが裏切り者だと確信するのです。その際、イーサンが言うセリフがこちらです。

イーサン：「Before London — but after you took the Bible from **the Drake Hotel in Chicago.**」

この言葉を聞いた瞬間、思わず「私が泊まったあのDrakeだ!」と胸が高鳴りました。

思いがけず映画と旅がつながった発見が、今回の旅で最も印象に残る出来事だったかもしれません。

皆さんもシカゴを訪れる機会がありましたら、ぜひThe Drake Hotelに滞在し、『ミッション：インポッシブル』の世界と重ねて楽しんでみてください。

・ウィリス・タワー (Willis Tower) でのミッション？

シカゴには多くの観光名所がありますが、その中でも特に有名なのがウィリス・タワー(写真5)です。

実はこのウィリス・タワーも映画『ミッション：インポッシブル(M:I)』に登場しており、クライマックスシーンでイーサンがレストランからロープを使って降下する場面がここで撮影されたそうです。

ウィリス・タワーは1973年に完成した地上110階、地下3階、高さ442.1m(アンテナを含む)の超高層ビルで、完成当時から1998年までの25年間、世界一高いビルとして知られていました。

ちなみに、2025年現在の高層ビルランキング第1位はドバイのブルジュ・ハリファ (Burj Khalifa) で、高さ828m。ウィリス・タワーは29位に位置しています。

103階には展望台があり、ガラス張りのバルコニーからはシカゴの街並みやミシガン湖を一望できます。ガラスの床の上に立てば、まるで映画の主人公イーサン・ハントになったような気分を味わえるかもしれま

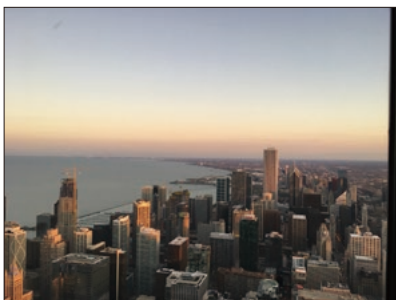


写真5：Willis Towerからの一望 気分はイーサン・ハント？

せん。

冒頭で今回は2018年に次ぐシカゴ再訪と記載しましたが、ここで少し2018年を振り返ってみたいと思います。

2018年は、ドナルド・トランプ大統領就任から2年目の年であり、国内外でその政策や発言が大きな注目を集めていました。

・トランプタワーと2018年回想

トランプ大統領といえば、シカゴには「Trump International Hotel and Tower Chicago(写真6)」があることで知られています。

この建物は地上98階、高さ423m(アンテナを含めると約527m)で、シカゴでは2番目に高い高層ビルです。高級ホテルとしてだけでなく、上層階は豪華なコンドミニウムとなっており、地元の富裕層や著名人が所有していることで有名です。

2018年の学会参加時、「ここに泊まりました！」——と言いたところですが、実際に滞在したのはこのタワーの道路を挟んだ向かい側のホテルでした。ホテル名は残念ながら思い出せませんが、壁がやや薄く、隣室や上下階からシャワーの音や話



写真6：Trump International Hotel and Tower

し声がよく聞こえたことだけは鮮明に覚えています。

そして時は流れ、2025年。奇しくもこの年は、ドナルド・トランプ氏が第47代アメリカ合衆国大統領として再就任した年でもありました。学会場へ向かうUberの車窓から再びTrump International Hotel and Towerを眺めながら、7年前との不思議な巡り合わせを感じ、少し感慨深い気持ちになりました。

・結びに

次にAACRがシカゴで開催されるのは2031年です。

そのとき、どんな風景が私を迎えてくれるのでしょうか。

『ミッション：インポッシブル』の舞台が再び登場するのでしょうか。トランプ氏は、そして世界はどうなっているのでしょうか。

そんなことを思い描きながら、もし機会があれば2031年の「海外散歩」で、また皆さまにお会いできればと思います。

(日動協ホームページ、LABIO21 カラーの資料の欄を参照)